

学年部会	テーマ「情報活用の実践力【あつめる】部会・4年」
実践内容	「どの子ども意欲的に効果的に情報を【あつめる】ための取り組み」
教科・単元名	4年 総合的な学習の時間 「心もバリアフリー / 福祉」

### 1. 実践活動のねらい

本校の4年生は総合的な学習の時間で「福祉」について学習する。子どもたちの実態をみると、「福祉」についての知識に偏りが見られたり、日常生活の中で多く目にしているであろう地域のバリアやバリアフリーについても気づいていなかったりする子どもが多い。自らが課題を設定し追及していく総合的な学習の時間は、情報活用の実践力（5つの力）を育成していくために最適な教科の一つであると考えている。そこで、どの子ども意欲的に効果的に情報を【あつめる】ための手立てについて考えていきたい。本単元に限らず、5つの力の最初に位置づけられている【あつめる】活動がどの子どもにとってもスムーズに進むことで、その後の活動もより充実したものになるのではないかと考えている。

### 2. 実践の内容・経過

どの子ども「知りたい・調べたい」という意欲がもてることで、初めて【あつめる】活動に入るスタートラインに立てると考えている。【あつめる】ための手段や技能もちろん大切だが、まずは全員に共通の課題意識をもてるような単元の授業デザインをしていきたい。また、実際に子どもたちが【あつめる】活動に入った時に感じる困り感などを想定しながら、【あつめる】ための手段や手立てについても考えたい。そうすることで、自分に合ったツールを選択したり、「知りたい・調べたい」事柄に合わせてツールを選択したりすることができるような力を育てていきたい。

#### ■具体的な手立て

##### (1) 子どもたちが意欲的に情報を【あつめる】ために

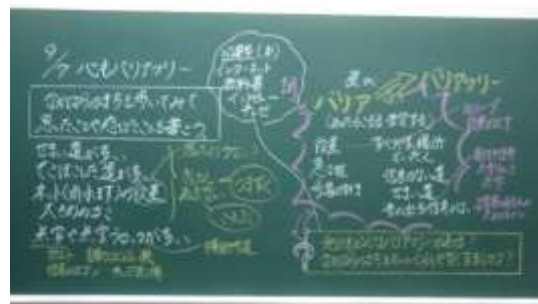
###### ●子どもたちの考えを揺さぶる導入の工夫 ～中原のまちは誰にとっても暮らしやすいのか～

単元の導入で、子どもたちが暮らしやすい中原のまちの魅力について考える活動を設定した。2年生のまち探検や3年生の地域の絵地図作りを通して、中原のまちの魅力を多く学習してきた子どもたちは、地域に残る文化遺産や公共施設など多くの中原のまちの魅力を生き生きと話す姿が見られた。子どもたちに「多くの魅力が詰まった中原のまちは暮らしやすい？」と尋ねると、「暮らしやすい！」という答えが多く返ってきた。そこで「本当に誰にとっても暮らしやすいのかな？」と尋ねると、少し悩む子どもや周りや相談を始める子どもの姿が見られた。一方で、「絶対に暮らしやすい！」と主張を続ける子どもの姿も見られた。そこで、その時間は一度授業を終え、次の時間に改めて「中原のまちは誰にとっても暮らしやすいのか？」について話し合うことにした。子どもたちには、次の時間までにそれぞれが「暮らしやすい」「暮らしにくい」と考える根拠について考えてくるようにと指示をした。次の時間の話し合いでは、まちの魅力を伝える「暮らしやすい派」の意見に対し、「暮らしにくい派」の子どもたちからは高齢者や障害のある方の視点に立った意見が多く出された。すると、「暮らしやすい派」の子どもたちからも「そういえば、家の近くにある点字ブロックも目の見えない人にとっては暮らしやすい」など様々な意見があがる話し合いとなった。そこで次の時間には、高齢者や障害のある方の視点に立ち、実際に中原のまちをクラス全員で歩いてみることにした。

###### ●全員が共通の課題意識をもつための工夫

###### ～中原のまちを歩いて「バリア」と「バリアフリー」を見つける～

実際に中原のまちを歩く前に「バリア」と「バリアフリー」という言葉の意味を押さえ、まちを歩きながら「バリア」や「バリアフリー」を見つけていくことができるようにした。また、見つけたものが一体どんな人にとっての「バリア」や「バリアフリー」なのかについても考えられるようにと話をした。2つのコースを2時間に渡って歩いてみると、中原のまちには多くの「バリア」と「バリアフリー」があることを子どもたちと共通認識することができた。すると、子どもたちからは「あのバリアをなくすためにはどうすればいいんだろう？」「中原のまちがもっと暮らしやすくなるためには、どんなバリアフリーがあるといいのかな？」と自然と多くの疑問があがってきた。子どもたち自身からあがった「知りたい」「調べたい」事柄について次の時間から調べていくことになった。



●アイマスク体験を通してあがった感想や疑問を【あつめる】活動に生かす

【あつめる】活動に入る前に、川崎市社会福祉協議会からお借りしてきたアイマスクを使って、子どもたち全員がアイマスク体験を行った。子どもたちからは「電車に乗るときには、怖くて困るはずだ」などの感想や「時間を知るときにはどうするのだろうか？」などの疑問が多くあがってきた。実際に自らが体験してあがった疑問を解決するための情報を【あつめる】活動に繋げていくことができた。

(2) 子どもたちが効果的に情報を【あつめる】ために

●図書資料の精選

子どもたちが【あつめる】活動に入る前に、教師側でピックアップした図書資料を学年の本棚に40冊準備した。子どもたちが参考にしたページや図や表を用いたページには付箋紙を貼らせ、情報を【あつめる】ことが苦手な子どもも、友だちが参考にしたページが自然とわかり、情報を集めやすいようにした。

●【あつめる】情報の精選

実際に情報を【あつめる】活動に入る前に、子どもたち一人ひとりが今の時点でわかっている事柄とこれから調べていかなければわからない事柄について整理する時間を設定した。そうすることで、子どもたち自らが求める情報をより絞っていくことができると考えた。また、それぞれの整理が終わったら全体で自由に交流する時間を設定し、自分と似た情報を集める友だちを把握したり、友だちがわかっている情報についてアドバイスをしたりすることができるようになった。

●聴覚障害者の方と通訳者の方との交流

単元の後半に、各クラスで聴覚障害者の方と通訳者の方との交流の時間を設定した。聴覚障害者の方に通訳者の方を通して日常生活の様子や日常生活の中で困ることについてお話をいただいた。実際に生の声を聞くことで、どの子どもも関心をもって聞く姿が見られた。活動の最後には質問にもお答えいただき、情報を集めていく中で新たにあがった疑問や情報を集めることができなかった事柄について直接お話いただくことができた。

3. 考察・成果や課題

単元の最後には、それぞれが集めた情報をもとに一人一枚の新聞を作成した。単元の導入での話し合いや実際に中原のまちを歩いてあがった疑問をもとに立てた学習課題に対し、多くの子どもたちが課題意識をもって意欲的に情報を【あつめる】姿が見られた。すべての子どもたちが自ら集めた情報をもとに、新聞を完成させることができたことは大きな成果であると感じている。一方で、自らが集めたいと考えた情報をうまく集めることができなかった子どもの姿も見られた。各校に配置されているタブレットPCを使ってインターネットサイトの精選を図るなど教師側の手立てが足りなかった点においては課題が残った。また、今回は情報活用の実践力の【あつめる】に特化して実践に取り組んできたが、集めた情報を新聞にまとめていく際に困り感を感じている子どもや、集めた情報の中から必要な情報をうまく取捨選択できていない子どもの姿も見られた。やはり、5つそろっての情報活用の実践力であって、単元全体を見通し、他の力についても手立てを考えていく必要があることを改めて感じた。しかし、この報告書の最初にも述べたように「5つの力の最初に位置づけられている【あつめる】活動がどの子どもにとってもスムーズに進むことで、その後の活動もより充実したものになるのではないかと考えている」という点については、今回の実践を通して大きな手応えを感じている。やはり、いかにして子どもたちが目的意識をもって【あつめる】活動に入っていくかが、子どもたちにとって充実した有意義な単元になるかの大きな鍵になるのではないかと考えている。今回の実践を通してあがった成果や課題を活かしながら、今後も子どもたちの情報活用の実践力を育てる授業デザインを進めていきたいと考えている。



